

親日国モンゴルと日本——モラロジーの視点から（第一回）

元モンゴル駐箚特命全権大使
中央大学特任教授・千葉工業大学特別教授

清水 武則



清水 武則 氏

私は、四〇余年の外務省人生の過半を直接モンゴルとかかわってきたモンゴルの専門家です。外交官というとサミット国のような大国で働くエリート公務員のイメージがありますが、世界には二〇〇国近い国があり、日本大使館が一五四か国にあります。大半が発展途上の国々です。これらの国と日本との関係を発展させることが外交の目標ですが、当然それらの国の専門家が必要になります。特定の国、

安全保障、国際法、広報文化、領事といった特定テーマの専門家として外務省は明治時代から特別の採用試験制度を維持しており、現在は外務省専門職試験という独立した試験があります。私は、この試験の前身である外務省語学研修員試験で外務省に入り、モンゴルの専門家となり、外務省人生の過半をモンゴルとの関係発展のために尽くしました。た。ただ、米国やカナダでの外國勤務のほか、国内では国際法、広報、領事分野等で勤務するなど、モンゴルの専門家だからモンゴルしか担当しないということではなく、幅広い仕事ができるのが外務専門職の魅力であると言えます。

モンゴルは、日本でのモンゴル力士の活躍もあり、そういう国があることは相当知られるようになり

ましたが、一般的なイメージとしては草原の国ということだと思います。現在のモンゴルは一二〇六年にチンギス汗が建国したモンゴル帝国の末裔の人たちの国です。一九二一年の独立以来ソ連（ロシア）の強い影響下にある社会主義国でした。ソ連崩壊と時を合わせるように一九九〇年にモンゴルは民主化されましたが、それまでソ連の援助でなりたっていた国家はソ連からの援助が止まり、発電所は故障して頻繁に停電したり、通勤するバスが修理できず会社や学校に行くのも一苦労。店から肉しか購入できないなど、大混乱の時代に突入します。そこには早くモンゴル支援の手を差し伸べたのが日本です。日本の支援は、国際通信、鉄道、道路、空港などの既存インフラから始まり食糧援助、文化財の保護など

日本は五十五校を首都ウランバートルと第二の都市ダルハンに建設し、現在そこで一〇万人近くの生徒が学んでいます。日本の無償資金協力でつくられた学校の入り口には日の丸と「日本国民から」というプレートが埋

ど多分野にわたりますが、モンゴルが九〇年代の経済混亂期を乗り切った後の支援は教育に重点がおかされました。

教育分野における支援も多岐にわたりますが、その中でモンゴル国民に最も感謝されたのは学校建設と修復です。モンゴルでは一年生から一〇年生が一つの学校で学ぶのが普通です。ところが人口の拡大に学校の収容能力がついていけませんので、低学年は午前中、高学年は午後というように二部制を採用しているところがほとんどでした。中には三部制の学校もありますた。

め込まれています。また、私は在任中地方に出かけると必ず学校に立ち寄つて状況を視察しました。



地方の学校で夢を聞く

地方の学校は予算もなく、マインアス三〇度になつても割れたガラスを取り換えることができず、新聞紙を何枚も貼つて寒さをしのいでいたり、屋根に木が生えて、そこから雨漏りがしたり腐食したりと、驚くような状態の学校がたくさんありました。

学校を建て替えるには大金が必要で、修復なら一〇〇〇万円あれば十分可能です。そこで日本大使館では「草の根無償資金協力」という言葉で、昔から「国づくりは人づくりから」と言われるように、人材の育成は国家発展の基礎であるからです。学びの環境を整備することは、そのため極めて重要だと思います。

また、モンゴル人は向学心が強く、上昇志向を持つ国民です。かつて世界を支配した民族の末裔だからでしょうか。大学進学率も七〇%に達しています。親御さんたちの最も関心があるのは、子どもたちが勉強して豊かになっていくことです。つまり、モンゴルでは教育支援は最も感謝される援助ということになります。日本は学校を新たに建設したり修復したりだけでなく、国費留学制度を活用し、学部や高専、専門学校にも毎年四〇人から六〇人程度の留学生を受け入れています。日本の大学卒業生の中から大臣になつた人は三人います。また、大企業の社長のデータ（二〇二〇年入管統計）では日本で学ぶ学生は私費留学

力」という援助プログラムを使って地方の二〇〇校以上の学校の修復を実施しました。

なぜ教育に力を入れるかということですが、昔から「国づくりは人づくりから」といふように、人材の育成は国家発展の基礎であるからです。学びの環境を整備することは、そのため極めて重要だと思います。また、モンゴル人は向学心が強く、上昇志向を持つ国民です。かつて世界を支配した民族の末裔だからでしょうか。大学進学率も七〇%に達しています。親御さんたちの最も関心があるのは、子どもたちが勉強して豊かになつていくことです。つまり、モンゴルでは教育支援は最も感謝される援助ということになります。日本は学校を新たに建設したり修復したりだけでなく、国費留学制度を活用し、学部や高専、専門学校にも毎年四〇人から六〇人程度の留学生を受け入れています。日本の大学卒業生の中から大臣になつた人は三人います。また、大企業の社長のデータ（二〇二〇年入管統計）では日本で学ぶ学生は私費留学

を加えると四〇〇〇人に達しており、民主化が実現した一九九〇年にはわずか一人であったことを思うと隔世の感があります。

日本政府はモンゴルにこれまで多額の支援をしてきましたが、モンゴルは何をしてくれたのか、という疑問を持たれる方も多いでしょう。モンゴルの諺に「苦しい時に友の価値を知る」というものがあります。モンゴルが社会主義を放棄して民主主義、市場経済化の道を歩み始め、経済社会が大混乱に陥った時に、いち早く救いの手を差し伸べ、貫して支援してきたのが日本です。阪神・淡路大震災が発生した時に、外務省でモンゴル班長をしていた私に、突然モンゴルの副首相から電話があり「日本が大変な時にモンゴルとしても、友として何かしたい」と言って、彼自身が特別機で毛布やカシミアの手袋などをたくさん持参してくれました。東日本大震災の時は、全国から支援が寄せられ、人口三〇〇万人の小さな貧しい国ですが、三億円以上の募金がありました。モンゴルは

常任理事国入りに中国や韓国が国际社会で大反対をする中でも一貫して支持してくれたり、北朝鮮による拉致問題でも、横田めぐみさんのご両親がめぐみさんのお嬢さんやお子さんと一緒に環境でお会いする機会を提供してくれるなど、日本に対してできる限りのことをしてくれていることを知つていただきたいと思います。

私は、モラロジーの基本は、人への思いやりであると思います。人の集合体である国家のレベルにおいてもその思いやりが、国際社会の平和の基礎であると確信している次第です。



草の根無償資金協力（地方の学校修復完成）